

## 意志と対象

### The Will and the Object

星野 徹\*

HOSHINO, Toru

私たちは行為することによって何かを変え、あるいは何かをもたらそうとする。そして、その「何か」は行為に先立つ意志あるいは意図の対象となっている。人は何かを変え、何かをもたらそうという意図に導かれて行為するのである。以下において、意志と行為と対象の関係について考えることにしたい。身体的領域と心的領域にまたがる行為の構造を統一的に理解する可能性と、心的行為を身体的行為から分かつ心的行為の独自性が見えてくるかもしれない。

#### I 行為の対象

身体的行為の多くは外界の対象に向けられる。コーヒーカップをつかもうとして手を伸ばす、シュートを決めようとボールに向かって足を蹴り下ろす、腕に止まっている蚊をたたこうとする、これらは、コーヒーカップ、ボール、蚊を対象としている。そして、このような行為において、行為者は自分の行為の対象が何であるか知っている。私はあのコーヒーカップをつかもうとしているのであり、このボールを蹴ろうとしているのであり、あの蚊をたたこうとしているのである。

コーヒーカップをつかみ損ねたり、ボールを蹴り損ねたり、気配を察した蚊が飛んで行ってしま

うといったことはあるだろう。また、似たようなコーヒーカップがたくさんあれば、数あるコーヒーカップのうちどれをつかもうか決めないままに動作を開始するということもあるかもしれない。さらに、これをつかもうと思って手を伸ばし始めたものの途中で別のカップに目移りして、手の向かう先を変更するといったこともあるかもしれない。しかし、特定のカップに手を伸ばそうとしているにもかかわらず実は手を伸ばそうとしているのは別のカップなのだ、といったようなことはあり得ないことのように思われる。

キャンベルは行為の対象について行為者自身が同定の誤りを犯す可能性は存在しないと言う。そして、行為の対象についての一人称的知と三人称的知のあり方の違いを次のような例によって示している(Campbell, 2003)。

りんごの山を前にした人がりんごの山へ向かって手を伸ばしている。それを見ている人は「あの人はきっとりんごをとろうとしているのだろう」と思うだろう。手が特定のりんごに近づくように見えたならば、「彼はあのりんごをとろうとしているのだろう」と多くのりんごの中から彼がとろうとしているりんごを特定するかもしれない。しかし、こうした第三者の判断は誤ることがある。実際は、彼はあのりんごではなくてその隣のりんごをつかんでしまうかもしれない。また、彼はりんごに興味などなく肩こりをほぐそうとして手を伸

\* ほしの・とおる  
埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授、哲学

ばただけなのかもしれない。他人の行為の対象を知るには、動作を手がかりに他人の心の中を推測してみる以外にはないのである。一方、行為者本人にとって、こうした対象の誤認が生じることはない。行為者には行為対象の知についての一人称的特権があるのである。

行為者は、また、行為主体についての誤同定の可能性からも免れている、と多くの哲学者は考えている。りんごに手を伸ばしているのは私だろうか、と自問することは普通はないだろう。自分がりんごに手を伸ばしているように私に思われれば、実際にりんごに手を伸ばしているのは私なのである。キャンベルは、こうした行為主体を指す一人称代名詞に関する誤同定の不可能性は、行為の対象に関する誤同定の不可能性に由来すると主張する。私が行為主体である行為とは、そのターゲットについて同定の誤りが生じることがないような行為なのである。病的なケースにおいて行為者性の感覚が失われるとすれば、それはキャンベルによれば、行為がどの対象に向けてなされているのか行為者が仮定的にしか知ることができなくなっているからなのである<sup>1</sup>。

ところで、何が行為の対象であるか行為者自身にさえはつきりしないということはあるだろうか。「自分がどのりんごをとろうとしているかわからない」と言えば自分の意志が決まっていないということであって、どれをとろうか決めているにもかかわらずどれをとろうとしているかわからないということではない。また、私はこれをとろうとしていると思っているにもかかわらず、実際には別のものをもってしまったとすれば、私は自己欺瞞に陥っているのでなければ、私は行為者性を失っているのである。手を伸ばしているのは私ではないのである。誰かが私の体を操って私の欲していない対象に私の手を向かわせているのである。しかし、この場合でも、意志された対象に関する

同定の誤りが生じているわけではない。私はとにかくこれをとろうと心に決めたのであり、そのことを疑いの余地なく私は知っている。

このように、行為の対象に関する誤同定の可能性があり得ないのは、どれをとるか決める際に二つのことが行われているわけではないからである。あらかじめ特定のりんごをとろうと決めた上でりんごの山に向かい、その中から当のりんごを探し出す場合ならば同定の誤りが起こることがあるだろう。事前に意図されていた対象と実際の行為の対象が食い違うということも起こるだろう。しかし、りんごの山を前に、その中の一つのりんごをとろうとするときには、私は目についたりんごに手を伸ばすだけである。そこに、同定の誤りが入り込む余地はない。

ただし、これは行為の対象に限って生じる現象であるというわけではない。目の前にある対象を見て「あれは猫だ」と思ったとしよう。こうした判断は誤ることがある。あれは猫ではなく、タヌキかもしれないしぬいぐるみかもしれない。「あれ」が属する種についての判断を誤っているかもしれないのである。しかし、「あれ」によって実は異なった視覚対象を指していたなどということは生じようがない。理由は行為の対象の場合と同じである。私が「あれは猫だ」と言うとき、私は目の前に見える対象に注意を向けているだけだからである。行為の対象に関する誤同定の不可能性は、知覚対象に関する誤同定の不可能性の亜種と見なすべきであるように思われる。

行為の中には、外界へ向けてなされる意図的行為であるにもかかわらずその対象が確定していないようなものがある。用心深い人間が、寝過ぎすまいと複数の目覚まし時計をセットして寝たとしよう。目覚まし時計の音で目が覚め、暗闇の中で手を伸ばそうとしているとき、彼の行為の対象が定まっているわけではない。彼は「これを止めよ

う」と思っているのであるが、「これ」はけたたましい目覚まし時計の音である。そして、それがどの目覚まし時計であれ、とにかくこの音を出している目覚まし時計を手で探っているのである。また、新聞を読みながらテーブルの上の皿に盛ってあるりんごの切れ端にフォークを伸ばす人は、特定のりんごの切れ端をとろうとしているのではなく、それがどのりんごであれ、とにかくフォークの先に触れたりんごを食べようとしているのである。このようなとき、行為は特定の対象に向けられているわけではない。行為者は、注意を特定の知覚対象に向けた上で、「これをオフにしよう」、「これを食べよう」などと心に決めているわけではない。行為者の意志はいわば一般的なものである。それにもかかわらず彼らに行為者性の感覚が欠けているわけではない。目覚まし時計の音を止めようとして手を伸ばすのも、りんごにフォークを刺そうとしているのも自分自身であるということを行為者はよく知っている。

行為者性の感覚は行為を試みること(trying)に気づくことによって生じるという説が正しければ、行為者の気づきの内容は試みることの内容であることになるだろう。このりんごをとろうと試みているのならば、自分はこのりんごをとろうとしているということに気づくことになるだろうし、特定のりんごにターゲットを定めずに、フォークの先に触れたりんごをとろうと試みているだけであれば、自分はフォークの先に触れたりんごをとろうとしているところであるということに気づくことになるだろう。内容なき試みることといったものは存在しないように思われる。そのようなものは意図的行為の要件を満たさないだろう。意図は必ず対象を持つからである。試みるとは常に何かを試みることであるだろう。そして、試みていることに気づく人は、自分がその何かを行っているということにも気づいているだろう。したがって、

自分が何をしているかはわからないものの、とにかく何らかの行為の主体であることには気づいている、といった事態が生じることもないだろう。

ただし、キャンベルが主張しているように、行為の対象が誤同定不可能な仕方では知覚的に指示されていなければ、行為を自分に帰属させることができなくなるというわけではない。試みの内容がどのようなものであれ、試みていることに気づいている人は自分が行為主体であることに気づいているのである。

## II 行為と身体像

太陽の光を遮るために手をかざす、しびれをとるために足の指を動かす、ピアノがうまく弾けるようになるために手の指を開いたり動かしたりしてみる、肩こりをほぐそうと手を伸ばす、これらは、身体的行為であるにもかかわらず、外界に行為の対象を持たない。行為者はこれらの行為を遂行することによって外界に変化をもたらそうとしているわけではない。それでもやはり、行為者は自分がこれらの行為の主体であることに気づいていることに変わりはない。

特定のりんごをとろうとする場合は、行為者はりんごを見ながら「このりんごをとろう」と試みるのであり、行為の向かうべき対象は視覚的に与えられている。手の指を動かす場合はどうか。行為の対象はないと言っても、試みることの内容がからっぽであるというわけではない。行為者は、たとえば、右の人差し指を動かそうと試みるのである。ところで、右の人差し指を動かそうと試みるとはいったい何をすることなのだろうか。というのも、右の人差し指が行為者にいつも知覚的に与えられているとは限らないからである。

広げた右手の人差し指に視線を集中しながら「これを動かそう」と試みることならできる

だろう。しかし、「これを動かす」とは何をすることなのだろうか。視野の中心に見えるりんごをとるには、りんごのところに手を伸ばしてその手でりんごをつかめばよい。同じように視野の中心に見える右手の人差し指を動かすには、左手を右手の人差し指のところへ持って行って指をつまみ、左手を動かせばよいのだろうか。もちろんそのようなし方で自分の右手の人差し指を動かすことはできるが、私が求めているのはそのような動かし方ではない。私は、いわば直接的な仕方で自分の右手の人差し指を動かしたいのである。

この問題はマルブランシュを機会原因論へと誘った問題とよく似ているが、それとは別のものである。

マルブランシュは誰も自分の腕をどのようにして動かしているのか知らないと言う。たとえば、人は大きな塔を倒すことはできなくとも、どのようにすれば塔を倒すことができるか知っている。土台を掘り崩して行けばよいのである。ところが、障害がない限り誰でも自分の腕を動かすことができるにもかかわらず、どのようにして自分の手を動かしているのか誰も言うことができない。腕を動かそうと意志すれば腕が動くので、意志は腕の運動の自然的原因と見なすことはできるが、マルブランシュによれば、実際に腕の運動を引き起こしているのは神であり、腕を動かそうとする意志は神の力が働くための機会(occasion)、すなわち、腕の運動の機会原因(cause occasionnelle)に過ぎないのである(Malebranche, 1979, pp.648~649)。

マルブランシュの指摘は基礎行為と呼ばれる行為全般に妥当するものである。誰かが何かを行った場合、「あなたはどのようにしてそれを行ったのか」と尋ねることができる。「栓抜きもないのにどのようにして栓を開けたのか」「どのようにして手錠を外したのだ」「どのようにして犬小屋を作ったのだ」等々。人は、ビールの開栓や手錠の脱着や

犬小屋の建造を直接引き起こすことはできない。私たちは何かをなすことによってビールの栓を開け、手錠を外し、犬小屋を作るのである。そして、上の問いにはその「何か」を持ち出すことによって答えることができる。「机の角に栓を引っかけて瓶を引っ張ったのだ」、また「落ちていた先が曲がった釘で鍵穴をかき回したら手錠が外れたのだ」というように。「どのようにして」の問いはさらに続けることができるだろう。しかし、それは必ずどこかで行き止まりになる。行為には、他の何かをなすことによってそれをなすようなものではないような行為が存在する。そのような行為がなければ私たちは行為の起点となることができないことになるだろう。

腕を曲げる、口を開く、足を上げるといった、それらをなすために他の何かをなす必要がない行為に関しては、したがって、「どのようにして」の問いに答えるすべがない。「どのようにしてあなたは腕を上げたのか」と問われても、せいぜい「私は腕を上げただけだ」とオウム返しに答えるか、「腕を上げようとしたら(腕を上げようと試みたら)腕が上がったのだ」と自らの行為者性を否定するような語り口で答えるしかない。

「腕を上げようとしたら腕が上がった」あるいは「腕を上げようとする(腕を上げようと試みる)ことによって腕を上げた」という答えがマルブランシュを満足させなかったのは次のような理由による。腕を上げようとするのと腕が上がることの間には、筋肉の収縮や動物精気の運動が介在していることだろう。犬小屋を作るためには板を切り、板を組み上げる等々といった過程が必要であるのと同じことである。しかし、犬小屋の場合には、制作者はこうした過程についてあらかじめ知り、そのような過程を意識的になぞる必要があるが、腕を上げることについてはそのようなことはない。腕を上げる人は、腕を上げようとするこ

とによってどのようにして動物精気の運動が生じ、それがどのようにして筋肉を収縮させ、腕の上昇を引き起こすのか知らない。さらに、動物精気の運動や筋肉の収縮について何も知らない人でさえ、腕を上げようとするれば腕が上がるのである。だから、「あなたはどのようにして腕を上げたのか」という問いに対する答えとして「腕を上げようとすることによって」では十分ではないのである。神の創造したこの世界では、なぜか知らないが、腕を上げようとするれば腕が上がるようになっているのである。

私がここで問いたいのも「腕を上げる人はどのようにして腕を上げるのか」という問いであるが、マルブランシュの問題よりも一つ手前で生じる問題である。それは、「腕を上げようとする」ときの「腕」とはいったい何か、あるいは「腕とはいったいどこにあるのか」という問題である。

目の前のりんごをつかむ場合ならば、腕の運動は意識下においてなされていると言えるだろう。行為主体が腕の動きや指の開き具合などを意識的に統制しているわけではないだろう。しかし、外界の対象に向かっていない純粋な身体的行為の場合は事情が異なる。腕を意図的に上げることができるためには、行為者に対して腕が何らかの仕方で現れていなければならぬ。「腕を上げよう」あるいは「これを上げよう」とする場合には、「腕」や「これ」によって指される対象が与えられていなければならない。そうでなければ試みることの内容が空になってしまうだろう。「右手を上げてください」と言われても、言われた人は何をどうしてよいかわからないだろう。

再び右手の人差し指を例にとってみよう。右手の人差し指を動かそうとすればいつでも動かすことができる。右手の人差し指が知覚的に姿を現していないくとも、たとえば、暗闇の中でも、目を閉じていても、左手で右の人差し指に触れていなく

とも、右手が何かをつかんでいなくとも、私は右手の人差し指を意図的に動かすことができる。また、右手の人差し指が感覚的に姿を現していないくとも私は右手の人差し指を意図的に動かすことができる。右手の人差し指が痛くもかゆくもなくとも、右手の人差し指が腫れて熱を持っていないくとも、私は自分の右手の人差し指を動かすことができる。しかし、右手の人差し指が知覚的にも感覚的にも私に姿を現していないとすれば、どのようにして私は自分の右手の人差し指のありかを知るのだろうか。「これを動かそう」と意図するときの「これ」はいったいどこにあるのだろうか。確かに、右手の人差し指を動かし始めれば、私は自分の右手の人差し指のありかを知ることができる。右手の人差し指が運動感覚的に私に姿を現すからである。問題は、そもそもどのようにして人差し指を動かそうと試みることができるのかということにある。

両腕から力を抜いてだらりと垂らしてみよう。自分の指が曲がっているかまっすぐか、私は知ることができる。また指が開いているかどうか、開いているとすればどれ位開いているか、などということもおおよそ知ることができる。これらはアンスコムが「観察によらない知」と呼んだ種類の知である(Anscombe, 1957, 1981)。他人の指が曲がっているか、また指の間がどれほど離れているかといったことを知るには、相手の手を見なければならぬ。暗闇の中にいるならば相手の手に触れてみなければならぬ。いずれにしても相手を観察しなければならぬ。それに対して、自分の手の状態ならば、見たり触れたりすることがなくとも、いわば内側から知ることができる。こうした観察によらない知が人差し指のありかを知らせてくれるのだろうか。

アンスコムは観察によらない知の一つとして自分の足が組まれていることという微妙な例を挙げ

ている。足が組まれているならば、上の足と下の足の上に触り・触られる感覚が生じるはずであるし、また足相互の抵抗感や圧迫感も生じるだろう。こうした感覚を手がかりに私たちは自分の足が組まれているということを知るのでないだろうか。しかし、アンスコムによればこれらの感覚は自分の足が組まれているという知にとっては付帯的なものに過ぎない。自分の足以外の物体によっても触感や抵抗感や圧迫感が生じるからである。触感や抵抗感や圧迫感が他ならぬ自分の足によって生じたものであるということを知るには、自分の両足の位置についてあらかじめ知っているのなければならないのである。

自分の身体の位置についての知が観察によらずに獲得されると言っても、そこにいかなる感覚も関与していないというわけではない。手の状態について知るには筋肉や関節に関する位置感覚による情報が不可欠であろう。ただ、観察によらない知をもたらす位置感覚は、その内容に関する記述を感覚によって知られる事実の記述から分離することができないという特性を持っているのである。エレベーターで降りるときの感覚とは、「突然軽くなり、胃が飛び出すような感覚」と記述することができるだろう。体が軽くなり、胃が飛び出すように感じられることから、エレベーターが下降を始めたことを知るのである。それに対して、私たちは、足が組まれているような感覚そのものによって自分の足が組まれていることを知るのである(Anscombe, 1981, p.72)。

こうした固有感覚(proprioception)によって内側から得られる身体表象はきわめて曖昧なものである。指がまっすぐか曲がっているか、指が開かれているか閉じられているかということは知ることができても、それぞれの指の長さがどれほどあるかということは知ることができない。それどころか位置感覚のみによっては指が何本あるかという

ことさえ知ることができないように思われる。手で何かをつかんだり、指折り数えたりするならば触覚や運動感覚を通して指が五本あることを知ることができるだろう。しかし、意図的に親指から小指にかけて順番に折り曲げることができるためには、事前に指の表象が存在していなければならないだろう。それはどのような仕方で行っているのだろうか。

足の指となるとよりいっそう曖昧になる。靴下を脱いで仰向けに寝てみれば足の指の存在を感じることはなくなるだろう。それでもやはり親指や小指を意図的に動かすことはできる。さらに、人は鼻がついていることを内側から感じることはない。鼻孔の内側を空気が通り抜けることを感じることはあるものの、あのような形の鼻があることを何らかの内部感覚によって知ることができない。それにもかかわらず、多くの人は意図的に鼻をひくつかせることができるのである。

意図的な身体行為が可能であるためには、固有感覚によって得られる身体表象よりもさらに基底的な身体表象が存在しているのなければならないように思われる。このような基底的な身体表象を「身体像」と呼ぶことにしよう。身体像のあり方について考えるには視覚における視野の存在と対比するのが有益である<sup>3</sup>。

視野は縦に比べて横の方が長いということは誰もが経験上知っていることである。視野が横長であるとは言っても、しかし、視野に形があるわけではない。視野の外側に何かがあって、それによって視野が囲まれているわけではないからである。視野には内と外の区別がないにもかかわらず縦より横の方が長いのである。また、真っ暗闇でも、目を閉じていても、視野は存在していて横長である。目を閉じて、真っ暗闇の中に視野の真ん中に光が現れるところを想像してみよう。目を閉じても視野はあり、その視野には中心があるのである。

視野の左右両端に光が見える状況を想像することもできるし、視野の上下の端に光が見える状況を想像することもできる。目を閉じていても視野には上下左右があること、また、上下より左右の方が長いことがわかるはずである。しかし、これは想像上の視野であり現実の視野とは別のものではないのだろうか。そう思われるならば、目を閉じて、部屋の中の見慣れた物、たとえば、パソコンのマウスがどこにあるだろうかと思ってみればよい。「目を開けばパソコンのマウスはここに見えるだろう」と予想しながら目を開いてみると、パソコンのマウスはちょうど予想したところか、あるいは、予想より右か左か上か下か、とにかく視野のどこかに姿を現すことだろう。目を閉じながら、「マウスはここに見えるだろう」と予想するとき、「ここ」は現実の視野の決まった場所を指しているのである。

視野の存在を私たちはどのようにして知るのであるか。私たちは何かを見るとき視覚対象とともに視野も見ているのだろうか。そうではないように思われる。見ることができるのは外界の対象だけである。視野の存在を確認しようとして視野に注意を集中するなどということは私たちにはできない。私たちは視野を見ているのではなく、視野の存在が見ることを可能にしているのである。

痛みもかゆみもなく、何にも触れず、体を動かすこともせず、体に力も入れていないようなときには、触覚や痛覚や固有感覚などのいわゆる体性感覚(somatic sensation)からの情報は最小限にとどまっている。このような状況において、私たちは正確な身体表象を持つことはない。指や鼻だけではない。耳があるのかどうか判明に感じることはできないし、顔と首があつて後者が前者を支えているということさえ感じられないだろう。腹と背中との区別もつきそうにない。衣服を身につけずに立った状態にいるとすれば腹側の体表と背中側

の体表を判別することはできないだろうし、それがヴォリュームのある肉によって隔てられているという感覚もない。身体の量感といったものを感じることはない。しかし、それでも、痛みが生じればそれが体のどの部分に生じているか即座に知ることができる。腹側の皮膚がひりひりしているのか背中側の皮膚がひりひりしているのか、判断に迷うようなことはないだろう。胃の痛みは腹の表面とも背中側の表面とも違う場所、体の内部に感じられることだろう。また、かゆいのは鼻の頭であつて右の耳たぶではないこともすぐにわかるだろう。暗闇の中で光が現れれば、それが視野の中心からどちらにどれだけ離れたところに現れたのかすぐにわかるのと同様である。さらに興味深いことに、判明な身体表象を持っていないにもかかわらず、私たちは身体の特定の部分に注意を集中することができる。そして、その部位を「ここ」という指示詞によって内的に指すことができる。たとえば、目を閉じたまま鼻の頭に注意を向けて「ここを針で刺されたらどのように感じられるだろうか」などと考えることができる。「ここ」で指されたのが想像上の鼻であると思われるならば、目を閉じたまま実際に針で鼻先をつついてみればよい。針が「ここ」に触れたのか、「ここ」を外したのか、見当がつかはずである。

視覚において視野が果たしている役割を、触覚や痛覚や固有感覚などの体性感覚の場合はこうした身体像が果たしていると言えるように思われる。身体像自体は感覚的な存在ではない。自分が身体からなっていること、そしてそれが延長を持つことを私たちは何らかの感覚を通じて知るわけではない。痛みもかゆみも、筋肉感覚も運動感覚も生じていなければ、鼻の存在にも、耳の存在にも、背中側の皮膚の存在にも気がつくことはないとは言え、自分が身体をなくしたと思ってしまうことはない。何かの拍子にあそこが痛くなったりここが

かゆくなったりするかもしれないということを私たちは知っている。身体像があるからこそ、突然痛みが生じたときにも、それが生じたのがどの場所か瞬時に判断できるのである。身体像が体性感覚の定位を可能にしているのである。

しかし、視覚と体性感覚には違いもちろんある。視覚は主として外界のあり方についての情報をもたらしてくれるのに対して、体性感覚はその感覚が生じている部位の状態についての情報をもたらしてくれるからである。自分の足が組まれていることを観察によらずに知る場合、感覚経験の記述と身体状態の記述を分離することができないというアンスコム指摘は、位置感覚と呼ばれる感覚が自己の身体位置の状態に特化した感覚であるという事実由来のものであると考えられるだろう。

ところで、身体像は体性感覚の定位を可能にするだけでなく、意図的な身体的行為の基盤も提供しているように思われる。人差し指を動かしたり、人差し指にもう一方の手で触れたり、人差し指が腫れて熱を持っていたり、人差し指に痛みが生じたりなどしていないときには、人は人差し指があることを感じてはいない。こうした体性感覚からの情報なしにそれを意図的に動かすことができるのは、私たちが感覚的情報に頼ることなしに自分の人差し指に注意を向けることができるからである。人差し指を動かそうと意図するとき、あるいは、人差し指を動かそうと試みるとき、人差し指に注意を集中することによって、私たちは、人差し指を、人差し指の感覚なしに「これ」として指することができるからである。そして、それができるのは私たちが身体像を持っているからである。身体像を備えているが故に、私たちは人差し指を蜂が刺せば痛みが生じているのは人差し指であると知ることができ、人差し指を立てようと欲すれば人差し指を立てることができるのである。

また、人差し指ではなく親指や中指が立ってしまったなどということも起こらないのである。

身体像は身体運動や身体位置、触覚経験、痛みやかゆみの経験などを通じて徐々に形成されると一般的には考えられているようである。しかし、オショーンネシーは、身体像をその時々姿勢や運動に関する短期的身体像と、状況に応じて変化する短期的身体像の背景に恒常的に成立している長期的身体像に分類した上で、前者は後天的であるのに対して後者は生得的に成立しているのだからと主張している(O'Shaughnessy, 1998)<sup>4</sup>。

体性感覚によって得られる短期的身体像が時々刻々変化することには異論はないだろう。また、視覚情報と体性感覚の情報が統合されるためにも経験が必要であろう。たとえば、手のひらに見える傷の像と手のひらに感じられる痛みが同じ対象によって引き起こされたものであるということ、また、視覚的に現れる腕の運動と運動感覚的に現れる腕の運動が同一のものであるということなどを知るには、二つの像の間に規則的な連関があることを経験によって見いだす必要があるだろう。さらにまた、かゆいところに手を伸ばして搔くことができるようになるためにも試行錯誤の段階がなければならないように思われる。かゆみと運動感覚はともに同一の身体に関わる体性感覚の一種であるとしても、二つの統合が経験抜きで可能であるようには思えない。かゆいところを搔くには手の長さを知らなければならないし、運動感覚の持続時間と方向性とかゆみが生じている位置の関係性についても知っていなければならないだろう。その点で、かゆいところを搔くことと目の前のりんごをつかむことの間には大きな違いがあるようには思えない。

一方で、右手の痛みと左手の痛みが違う場所に現れること、右の手ひらのかゆみと右手親指のか



ゆみは、右の手のひらの痛みと左の手のひらの痛みより近い場所に生じたものとして感じられること、左手の触覚と左手の運動感覚は同じ場所に感じられることなどは、経験によって獲得されるような能力ではないだろう。右手の痛みと左手の痛みは、最初は区別できないものやがて経験によって異なった場所に生じたものであることが感じられるようになるなどということは信じがたいことである。二つの区別を可能にするような経験とはどのような種類のものなのか、明らかではないからである。また、赤ちゃんは手のひらに触れられると手を握ろうとするし、唇に触れた物を吸おうとする。こうした行為は触覚と運動感覚の連合が成立していなければ生じないだろう。感覚が生じる部位についてのこのような基本的な身体像は人が生まれながらに持ち合わせているのだろう。あるいは、人の大脳には生まれつき身体地図が描き込まれていると言い換えてもよい。そして、少なくとも、手を動かす、口を開く、声を出すなどの基礎行為に関しては、それらが可能であるためには基本的な身体像が成立しているだけで十分であるように思われる。

### III 心的行為

単なる身体運動と身体的行為の区別があるように、単なる心的出来事と心的行為の区別も存在すると考えられるかもしれないが、心的行為にはどのような種類のものがあるのかということに関して哲学者の見解は一致していない。ピーコックは心的行為として「決断すること(decidings)」「判断すること(judgings)」「受け入れること(acceptings)」「何かに注意を向けること(attendings to something or other)」「計算すること(calculatings)」「推論すること(reasonings)」「試みること(tryings)」を挙げる一方、「想像すること

(imaginings)」や「思い出すこと(rememberings)」は心的行為と見なされる場合もあれば単なる心的出来事と見なされる場合もあると言う(Peacocke, 2007, P.361)。それに対してメレは思い出すことは心的行為には含まれないと言い(Mele, 2009)、G.ストローソンは考えることや決心することも行為ではないと主張する(Strawson, 2009, pp.186~199)。

ピーコックにとって心的行為とは心的出来事のうち試みることを構成要素として含むものことである。それゆえ過去の出来事を思い出そうと試みることによって想起が生じた場合にはそれは心的行為となり、過去の出来事がふと思い浮かんだ場合にはそれは単なる心的出来事と見なされるのである。

心的行為が試みることによって引き起こされる心的出来事であるという点に関してメレはピーコックの見解を踏襲するが、メレは試みることには二つの種類があると言う。xを試みること(trying to x)と、自分がxするという状態を引き起こそうと試みること(trying to bring it about that one x-s)である。そして、行為と見なされるのは前者の場合だけである。たとえば、眠りに落ちることを行為と見なす人はいないだろう。眠りたい人は羊を数えたり睡眠薬を飲んだりするかもしれないが、これらは正確には眠りに落ちるような状態を引き起こそうと試みることであり、したがって、眠ろうという意図のもとに何かを行うことによって眠りに落ちたとしても、眠りに落ちることは行為ではないのである。メレによればおとといの夕食に何を食べたか思い出すような場合もこれと同じなのである。おとといのメニューを思い出そうとしてもなかなか思い出すことができない人は、手始めにおととい何をしたか思い出そうとしたり、昨日の夕食のメニューを思い出そうとしたりするだろう。おとといコンビニに行ったことや、タバ

はおとといの残り物のカレーを食べたことが思い出されるかもしれない。その結果、おとといはコンビニ弁当だった、あるいは、おとといはカレーだった、などということが思い浮かんだとしても、それは、思い出そうと試みることによって直接引き起こされた出来事ではないゆえに心的行為ではないのである。

G. ストロソンが考えることを心的行為と見なさないのは、人はどのような内容の思考を抱くかあらかじめ意図することはできないというよく知られた事実による。考えはその人のもとに突如として浮かぶのであり、その人がその考えを意図的に形成したわけではない。考えることにおいて人は行為者ではなく、考えが浮かんでくるのを待つ受動的な傍観者なのである。

身体的行為の場合には表に現れることのないこうした見解の相違は、心的行為における意図あるいは意志とその対象の関係が必ずしも判明ではないということに由来するように思われる。目の前のりんごをとる場合ならば、行為者はあのりんごをとるという意図を抱き、あのりんごをとろうと試みる。右手を上げる場合ならば、行為者は右手を上げるという意図を抱き、右手を上げようと試みる。前者においては行為の向かうべき対象が現前し、その対象が意図と試みることの内容を形成している。後者においてもやはり動かすべき対象が現前し、それが意図と試みることの内容を形成している。ところが、おとといの夕食のメニューを思い出そうとするときにも、哲学の問題を考えようとしているときにも、思い出されるべき対象や考えられるべき思考内容が意識に現前しているわけではない。これを思いだそう、これを考えようなどという仕方で対象が与えられているわけではないのである。それらがあらかじめ与えられているとしたら、改めて思い出そうとしたり考えようとしたりする必要はないことになるだろう。

そうであるとすれば、おとといの夕食のメニューを思い出そうと試みるとは、また、哲学の問題を考えようとするとは、いったいどのようなことなのだろうか。

「パンダの顔を想像してみなさい」と言われれば、パンダの顔が浮かんでくるだろう。パンダの顔を想像することは心的行為だろうか。パンダに慣れ親しんでいる人ならば、「パンダ」と聞いただけで自然にパンダの顔が浮かんでくるだろう。小学校一年生のときの担任の先生の顔を思い出す、『吾輩は猫である』の著者の名前を思い浮かべる、といった場合でも、「小学校一年生のときの担任の先生の顔」や『吾輩は猫である』の著者の名前」という言葉を聞いただけで顔や名前が浮かんでくるだろう。「味噌汁」や「ご飯」や「刺身」でも同じことである。ところが、「おとといの夕食のメニュー」ではそのようなことは起こらない。「昨日の夕食のメニュー」でも同じである。「昨日の夕食のメニュー」と特定の食べ物の像や名前が結びついているわけではない。それでは、昨日の夕食のメニューを思い出そうとするとき私たちは何をしているのだろうか。私の場合は、まず様々な食べ物の像を思い浮かべる。そのうちに「これだ」思われる物が現れるだろう。そして、「夕べはカレーだった」と思い出すのである。様々な食べ物の像を思い浮かべるとき、私は事前に特定の食べ物の像を思い浮かべようと意図しているわけではない。食べ物の像の出現を私が統制しているわけでもない。夕べの食事は何だったのだろうかと考えるだけで様々な食べ物の像が浮かんでくるのである。これらの過程に私の行為は含まれているだろうか。どこまでが私が行ったことなのだろうか。別の例を考えてみよう。

知っていたはずの曲のメロディーを忘れてしまうということはよくあることである。途中までは思い出せるのにその先が思い出せないとき、私た

ちは思い出そうとして途中まで口ずさんでみるだろう。あるいは、声には出さず頭の中、心の中で口ずさんでみるだろう。すると、その先のメロディーが浮かんでくるかもしれない。それでも浮かんでこないときは、いわば手探りで任意の音を続けてみるだろう。何度も試行錯誤を続けるうちに、ふとメロディーが思い浮かび、それとともに「これだ」という感覚がわいてくるだろう。こうして忘れていたメロディーを思い出すのである。忘れていたメロディーを思い出すことは私の行為だろうか。それともメロディーが浮かんでくるとき私は単なる傍観者なのだろうか。メロディーを思い出そうとして覚えている部分を心の中で口ずさむことはどうだろうか。しかし、メロディーを心の中で口ずさむときも、私の心の中に次に来るべき音が現前していて私がそれを意図的に呼び出すなどということを私が行っているわけではない。知っている曲を心の中で口ずさもうと思えば、心の中にメロディーが流れてくるのである。

思考には様々なタイプがある。暗算や演繹のようにマニュアルに従って答えを導き出すものもあれば、哲学の問題を考える場合のように道筋も答えも定まっていない場合もある。私が哲学の問題、たとえば意志と対象の問題について考えようと机に向かうと、様々な考えが頭の中に浮かんでくる。その中に「これだ」と思われるような考えが含まれていることがあり、それを私は文字化する。また、ごくまれに、定かではないがとにかく何かをつかんだという感触を抱くことがある。その何か定かではないものの周りを巡るようにして言葉の断片が去来するうちに、その何かの文の形で現れることがある。そして、それを核にいくつかの文が浮かんでくる。私が哲学の問題を考えているときには私の心の中で以上のような過程が進行しているように思われる。それでは、私はこのようにして生まれた思考の産出者なのだろうか。それと

も私は思考がわいて出てくるのを見守る傍観者に過ぎないのだろうか。

四つ目の例として感情を取り上げよう。喜ぶこと、悲しむこと、怒ることなどは心的行為とは見なされない。これらの感情の主体は文字通り受動的な状態にいる。ところで、私たちは他人に特定の感情を意図的に呼び起こすことができる。相手に侮辱的な言葉を浴びせることによって相手を怒らせることができる。似たような仕方ですらうちに怒りをかき立てることもできるだろう。以前自分に浴びせられた侮辱的な言葉を思い出すことによって、侮辱的な言葉を私に浴びせた相手に対する怒りの感情をわき上がらせることができるだろう。他人を意図的に怒らせることが、私が行ったこととみなされるとすれば、自分自身のうちに怒りの感情をかき立てることも私の心的行為であることになるのだろうか。しかし、怒りの感情がこみ上げてくること自体は単なる心的出来事であって心的行為ではないだろう。すると、怒りを再燃させようという意図の下に過去の侮辱を思い出すことによって自らのうちに怒りが生じた場合でも、私は受動的な存在に過ぎないということになるのだろうか。

おととい何を行ったか思い出すことによっておとといの夕食のメニューを思い出すこと、覚えているメロディーを心の中で口ずさむことによって忘れていた部分を思い出すこと、以前受けた侮辱を思い出すことによって怒りをかき立てること、これらはいずれも、心的状態を直接引き起こすことではない。他の何かを行うことによってそれらを引き起こすのである。また、記憶や怒りが生じることは単なる心的出来事であって心的行為ではない。しかし、だからといって、間接的な仕方での心的出来事の出現をもたらすことが心的行為ではないということになるわけではないように思われる。

たとえば、人の死は行為ではない。しかし、その死が意図的な仕方でもたらされるならばそれは殺人という行為の構成要素となる。死をもたらそうという意図の下に、ある人間が別の人間を短剣で突き刺したり、拳銃で撃ったりすることによって死が生じた場合には、刺した人間や撃った人間は殺人を犯したことになるのである。さらに注意すべきは、殺人者は死を直接もたらしたわけではないという点である。人は直接的に死を引き起こすことはできない。短剣で突く、引き金を引くなどの行為を通して、あるいは、腕を振り下ろす、人差し指を引く、などの基礎行為を通して死をもたらすのである。それにもかかわらず、やはり、殺人は彼らが行ったことなのである。

おとといのメニューを思い出すこと、曲の一部を思い出すこと、自らに怒りをかき立てることは、いずれも構造上は殺人と同じである。それならば、これらは心的行為の一種と見なされるべきであるように思われる。ただし、これらは心的基礎行為ではというだけである。

しかし、それらをなすことによっておとといのメニューを思い出したり、曲の一部を思い出したり、怒りをかき立てたりするとされる「それら」、すなわち、おとといの行為を思い出したり、メロディーを心の中で再現したり、過去に受けた侮辱的な言葉を思い出したりすることは本当に心的行為であると言えるのだろうか。さらに、哲学的思考の場合はどうなのだろうか。記憶像もメロディーも思考も私が直接生み出しているのではなく、私の心にわいて出てくるだけなのではないだろうか。こうしたことが心的行為ではないとすれば、それらによってもたらされる心的出来事もやはり心的行為の構成要素ではないことになるだろう。

ここでもやはり身体的行為との比較が役に立つ。私の右手の上昇は私の身体に生じる一つの出来事

である。それが特定の原因によって引き起こされた場合にのみそれは手を上げることという身体的行為の構成要素となるのである。その特定の原因とは言うまでもなく私が自分の右手を上げようと試みることである。記憶像やメロディーや思考が生じることも私の心における心的出来事である。これらが心的行為の構成要素となるのは、特定の原因、すなわち、思い出そうと試みること、考えようと試みることによって生じる場合である。試みることの存在が疑わしいと感じられるならば、身体的行為においても心的行為においても、うまく行かなかった行為のことを考えてみればよい。手の故障で手を上げようとしても手が上がらないときには、手を上げようとしたという試みが目的を達成しないままに残るだろう。また、知っているつもりで曲を心の中で口ずさもうとしたところ途中でつかえてしまえば、口ずさもうという試みだけが残ることだろう。哲学の問題を考えようとしても何も生まれないことや、おととい何をしたか思い出そうとしても何も思い浮かばないことは日常茶飯事である。思い出そうとする試みや考えようとする試みがむなしく空転するだけである。一方、眠られぬ夜に同じメロディーが頭の中を繰り返し駆け巡る場合や、頭の中をとりとめのない思考の断片が浮遊する場合にはそのようなことは生じない。メロディーが途切れた後にも、思考が去った後にも心の中には何も残らないだろう。

心の中でのメロディーの再生や直近の出来事の記憶像の出現や思考の出来がそれに先立つ試みることによって直接引き起こされているならば、これらは心的行為の構成要素と見なされることになるだろう。このような行為はそれによってさらなる心的行為が引き起こされることになるような心的基礎行為なのである。

これまでのところ、身体的行為と心的行為は全く同じ構造をしているように思われるかもしれな

い。脳神経科学者の伊藤も身体的行為と思考は制御論的には同一であると主張している。伊藤によれば運動は四肢を動かすのに対して、思考は脳の側頭連合野に表現されるイメージ、概念、観念を動かすのである（伊藤、2003、522頁）。

心的行為には伊藤が言うようなものも確かに存在する。パンダの顔をずっと思い浮かべたままにしておくこと、与えられた立体図形を頭の中で回転させてみることなどの場合は、心的行為の対象が意識に現前していて、行為者はその対象に働きかけるのである。しかし、考えることや思い出すことはそうではない。思考や想起に先立って思考されるべき観念や想起されるべきイメージが現前しているわけではない。また、どのような思考や像が生じてくるか、思考する者や想起する者が制御できるわけでもない。あることを考えようとし、あることを思い浮かべようとするれば、どのようにしてかは知らないが、とにかく一連の関連する思考や像が心に生じてくるのである。どのような思考が生じてくるかということは、思考する者のそれまでの経験や行為によって左右されるだろう。しかし、それでも考える人は思考の産出を制御できるわけではない<sup>5</sup>。

ある人の手がりんごの方に伸びるのが見えたとしても、見ている人は「あの人は目の前のりんごをとろうとしているところだ」と推測することができるだけである。それが何を指した行為なのか、第三者には確実に知ることはできない。そもそも、それが行為であるのかどうかさえ第三者には定かではない。それに対して、手を伸ばしている人は、自分が何をしているか、自分の行為の対象は何か、推論によらず知っている。私はあのりんごをとろうとしているのである。

人は自分以外の人が何を考えているところなのか知ることはできない。また、考えているのかどうかさえ知ることができない。一方、自分が考え

ている最中であるということを知っている。また、哲学の問題を考えている人は、自分が単に考えているだけでなく、哲学の問題について考えているということも知っている。しかし、考えている人も、これから自分がどのような思考を生み出すか知ることにはできない。考えようとするたびごとに、考える者にとっても未知の、新たな思考が生じてくるのである。考えることは新たな思考を創造することなのである。そして、考えることにおいて思考内容が事前に与えられていないことが、考えるという心的行為が持つ創造性の源泉となっているのである。

<sup>1</sup> キャンベルが「病的なケース」と言うときに念頭においているのは行為者性の感覚一般が失われる作為体験のような症状ではなく、片方の手が意図と無関係に運動するアナーキック・ハンド症候群(Anarchic Hand syndrome)と呼ばれる症状のことである。

<sup>2</sup> 行為と試みるものの関係についてはO'Shaughnessy(2003)、星野(2007)を、試みることと行為者性の感覚の関係についてはPeacocke(2007)をそれぞれ参照されたい。

<sup>3</sup> 身体像と感覚の想像との関係については以前論じたことがある。星野(2011)を参照されたい。ここでは本稿における視野のことを「目」と呼んでいる。

<sup>4</sup> オショナーシーは、身体的行為において身体部分が意志の対象となることができるのは、長期的身体像を背景として短期的身体像が意志の直接的対象として行為者に現前しているからであると考えている。

<sup>5</sup> 想起や思考において大脳に存在するとされる像や観念が役割を果たしていないということではない。たとえば、おとこの夕食に何を食べたか思い出したり、忘れてメロディーを思い出したりしたときの「これだ」という感覚は何についての感覚なのだろうか。思い出された像がおとこの行為と整合性を持つことや、ふとわいて出てきたメロディーがそれに先立つメロディーとうまくつながったことに気づいたという感覚なのだろうか。そのようなこともあるかもしれない。しかし、何よりも、それは、思い出されたものが何かと合致したという感覚であるように思われる。こうした感覚を先在する像のようなものを抜きに説明するのは不自然であるだろう。本稿で言いたかったのは、心的行為の中には観念や像の意図的操作ではないようなものがあるということである。

## 文献表

Anscombe, G. E. M. (1957), *Intention*, Blackwell. (『インテンション』菅 豊彦訳、産業図書)

Anscombe, G. E. M. (1981), *Metaphysics and the Philosophy of Mind*, Blackwell.

- Campbell, J. (2003), "The Role of Demonstratives in Action-Explanation", in J. Roessler and N. Eilan eds. *Agency and Self-Awareness*, Clarendon Press.
- 星野 徹(2007)、「因果性と心」『埼玉大学紀要 (教養学部)』第 43 卷第 2 号。
- 星野 徹(2011)、「他人の痛み」『埼玉大学紀要 (教養学部)』第 47 卷第 1 号。
- 伊藤正男 (監修) (2003)、『脳神経科学』、三輪書店。
- Malebranche, N. (1979), *De la recherche de la vérité, Œuvres I*, éd. établie par G. Rodis-Lewis, Gallimard, «La Pléiade» .
- Mele, A. (2009), "Mental Action :A Case Study", in L. O'Brien and M. Soteriou eds. *Mental Actions*, Oxford University Press.
- O'Shaughnessy, B. (1998), *The Will : A Dual Aspect Theory*, 2<sup>nd</sup> ed. Vol. 1, Cambridge University Press.
- O'Shaughnessy, G. (2003), "The Epistemology of Physical Action", in J. Roessler and N. Eilan eds. *Agency and Self-Awareness*, Clarendon Press.
- Peacocke, C. (2007), "Mental Action and Self-Awareness (I)", in B. P. McLaughlin and J. Cohen eds. *Philosophy of Mind*, Blackwell.
- Strawson, G. (2009), *Selves*, Clarendon Press.